Bチャレ　チャレンジ部門　実績報告書

団体名	ご近所 de BOSAI	**作成日**	3　月　30　日
企画名	みんなで大地震の初動を学ぶごちゃまぜ防災アクション ~ 未来へつなぐ地域力 ~		
あなたが考える文京区の課題	① 地域のつながりの希薄化 単身世帯の増加 近所同士の声かけ・助け合い意識が低水準 防災訓練を大切と考える住民：7.6% 近所の助け合いを今後取り組みたい対策に選択：9.6% （出典:「文の京」総合戦略R6-9) ② 災害リスクの高い子育て世代の基本的備え不足 35～49歳が人口ボリュームゾーン 家具転倒防止器具などの基本対策が未浸透 ③ 多文化共生防災の課題 誠之小学校では外国籍児童約3割 地震を知らない外国人住民も存在 備蓄品の名称や内容が理解されにくい ④ 都市型火災リスクへの理解不足 能登半島地震・輪島朝市での大規模焼失事例 都市部では人口集中・耐震未達成地域あり 「地震後の火災初動対応」の理解不足 ⑤ 要配慮者支援の意識不足 東日本大震災で障がい者死亡率は健常者の約2倍 聴覚障がい者は危険察知が遅れる傾向 支援アプリや資料の活用が低調・情報保障・こころのバリアフリーの浸透不足 ⑥ 防災情報ツールの活用不足 支援アプリの利用率が低い 公開資料（ハンドブック等）の認知不足		
実施期間	第1回 R7年12月14日 第2回 R8年1月24日 第3回 R8年2月8日	**実施場所**	第1、2回 誠之小学校体育館 第3回 オンライン
対象者	誠之小学校保護者と周辺地域の住民など 中国籍等外国にルーツをもつ住民、聴覚に障がいがある方		

参加者の募集方法	誠之小学校にご協力いただき、児童・職員にチラシ配布計3回実施 向丘地域活動センター所長の協力により事業の説明と向丘周辺町会にチラシ掲示のご協力を要請。２回目以降も、夜警のテントを回るなどして、計3回とも掲示実施。 向丘・汐見・根津の地域活動センター公式LINEで広報 団体SNS(Facebook, Instagram, X)・団体ホームページ・どっとフミコム
	●関係者との会議 10月中旬から月１回のペースで、関係者で連携会議 (9/18 保刈区議 誠之小学校PTA会長と面会) 10/7 向丘地域活動センター堀田所長・松澤副所長と面会 10/21 西片町会 梅村会長、栗原防災部長と面会 11/5 鮫島地域コーディネーター・誠之小学校土屋秀人校長と面会 体育館と他の教室の無料使用を許可いただく 11/8 西片町会防災訓練参加 11/11 防災危機管理課小倉大輝係長と面会 11/13 汐見地域活動センター長島所長と面会 11/11~14 町会掲示依頼 丸山新町町会、西片町会、向丘追分東部町会、向丘追分町会、向丘一丁目中町会、向丘一丁目上町会、東大農学部自治会、森川町会 11/18-19 デフリンピック駒沢陸上競技場で活動 12/7 誠之小学校通学の２中国人家庭を訪問 12/11 文京区聴覚障害者協会副会長と面会 12/11 東京都関連団体主催「やさしい日本語対応」講座参加 12/20 中国人と面会 12/23 誠之小学校第２回チラシ配布 12/27 向丘地区各町会の夜警テントまわり・チラシ配布 丸山新町町会、西片町会、向丘追分東部町会、向丘追分町会、向丘一丁目中町会、白山下町会、向丘一丁目上町会、東大農学部自治会 2026年1/23 誠之小学校第３回チラシ配布 丸山新町町会、西片町会、向丘追分東部町会、向丘追分町会、向丘一丁目中町会、向丘一丁目上町会

実施した事業内容	●アンケート検討 10月中旬に石田氏と３つのイベントの前後に実施する意識調査のアンケート会議 ●第1回イベント 12月14日(日)「おうち防災」ワークショップ開催(1時間) 講師：奥村奈津美氏 手話通訳士派遣2名派遣、別スクリーンによる文字情報の提供 ●第2回イベント 1月24日(土)東京都推奨映画「生きる 大川小学校津波裁判を闘った人たち」寺田和弘監督とのQ&Aで来場者の疑問に答える機会は英語対応の部屋では実施。対象: 小学校高学年以上(託児付) その他：別会議室英語字幕・『HELLO! MOVIE』方式に対応した視覚障害者用音声ガイド、聴覚障害者用日本語字幕対応映画の予定を、配給会社より手話入り映画の紹介を受け変更) ●第3回イベント 2月8日(日)オンライン「自分の備え・学校・地域の備え」 講師: NPO法人かながわ3.11ネットワーク 石田真実氏 多様な背景を持った人がアプローチしやすいオンラインで開催 アーカイブは実行委員だけの限定公開中 ●振り返り 2月14日石田氏とアンケート結果を分析し・意見交換会。結果を通して振り返り、今後の事業展開を考えるスタートとした。 2/25 フミコム 沖久保様、近藤様、田邊様面会 2/26 団体打ち合わせ 情報保障について 2/28 フミコム主催イベント 情報保障啓発 3月（予定） ・関係団体、連携団体に事業結果・成果の報告 ・団体打ち合わせ Bちゃれアンケートまとめ

事業実施に当たって実際に協力のあった団体・個人	向丘・汐見・根津の各地域活動センター、向丘地域各町会、誠之小学校地域学校協働本部、誠之小学校PTA本部・誠之小学校学校長・地域連携ステーションフミコム・丸山新町町会、西片町会、向丘追分東部町会、向丘追分町会、向丘一丁目中町会、向丘一丁目上町会、東大農学部自治会、森川町会		
収入内訳 **«結果»**	品目	金額	備考 （件数、単価などを詳しく記載）
	Bチャレ助成金	20,0000	
	自己資金	15,735	
支出内訳 **«結果»**	品目	金額	備考 （件数、単価などを詳しく記載）
	20251214 講演料	110,000	奥村(森)奈津美氏：講演代(税込)
	20251214 資料	2,640	『防災ロードマップ』資料代：50円×48枚（税別）
	20260124 映画版権	50,000	当日映像に瑕疵があったため 5,000円減額
	20260208,17 講演・防災コンサル代	30,000	石田真実氏：講演料・報告指導代
	20251225 A4用紙代	2,835	誠之小学校 3回分配布資料 2,500枚
	手話通訳士派遣代	20,000	2名×2時間@10,000円
	白黒コピー代	260	町会長会議不足分26枚×@10円
助成交付額/支出総額	200,000/215,735		

	1.当初想定していた成果に対して、達成度合いは10点満点中、何点ですか。その理由も含めて記載してください 【第1回】（学習導入） 1. 成果達成度　7 / 10点 ■理由： ＊本事業は「自助（家庭での備え）」の重要性を理解し、参加者が親しみやすく、自分事として災害後の生活をイメージできることを目的として実施した。結果、車椅子ユーザー、子育て世代、学生、高齢者、外国人、聴覚障がい者など、実際に多様な人々を呼び込みやすく「自分にも できる防災」を提供できた。 事前アンケートからは、生活維持（ライフライン・物資）に対する危機意識は一定程度存在していることが確認された。「知っているが動けない」層が45.5% →②備え不足の裏付けとなり課題②（子育て世代の備え不足）や⑥（情報ツール・備蓄知識不足）と一致している。 事後のアンケートでは、家の備えや家族との連絡をよくしたいが96%まで増加した。「自分ごと化」のきっかけとしては有効だった。 ＊しかし、中国行きの飛行機の運行停止が年末前に発生した結果、想定した中国にルーツを持つ人の参加希望は2名の台湾人に限定された。英国人の参加はあったものの外国人防災（③）はこの段階では詳細を把握できなかった ＊④「火災初動」の理解までは十分に踏み込めていない。火災ではないが、講師より能登半島でのストーブの上のやかんのお湯をかぶった子どもの事例から「自分の命は自分で守る」ことについて、具体的な家具転倒防止対策事例紹介などから「何をすると自分の命を守れるかわかった」が86%と出たのではないかと推察する。 ＊⑤要配慮者支援の意識については外国人からの自由記述はあったものの防災アプリ・情報ツール活用への言及が少ない。但し、事後に「初めて同時手話通訳を拝見しました。知れて良かったです。」などの言及があるが「情報保障」についてほとんど知られていないことを認識できた。 ＊①地域のつながりについて実施前は、地域や町会の防災を気にしているは27%、これまで地域の防災訓練に参加した人20%であったが、事後は、それぞれ83%、防災訓練に参加したいが82%まで大幅に増加した。 ②具体的備え行動への転換については意識は上がったが、この企画だけでは確認できなかった。 2. 気づき・再確認（箇条書き） ■気づいたこと ＊参加者は「不安」は持っているが、具体的な対策はこれからである ＊「水・トイレ・寒さ暑さ・家族と連絡が取れるか」など、生活実感に直結するテー

マへの関心が高い
＊必要なグッズの紹介、災害後の福祉(介護)へのニーズが強い
＊多文化・情報保障について、必要性の理解はあるが具体手段は知られていない
＊実施後は、「顔見知りになること」の重要性が複数回答にあり、関係性づくりが防災の基盤と認識。実施前は「近所の人と防災について話していない」73%
■改めて確認できたこと
課題①「地域のつながりの希薄化」は顕在化している
課題②「基本的備え不足」は、特に生活物資の視点で顕著
課題③「多文化共生」は、“伝え方”の問題として認識されている段階
課題④ 火災リスクの認識は確認されていない
課題⑤ ⑥要配慮者支援の認識不足は想定以上に大きい
- 防災啓発は「知識」ではなく「生活」に結びつけて関心を引き出す必要がある
- いくつかの町会は 「ヘルプマーク」の配布は実施済みであるが、「情報保障」についての具体的な配布は未実施と聞いた。
余興で行った防災盆踊りは多様な人々が呼びかけに応じて参加した。心理的ハードルを下げ、多様な住民が参加しやすさ、つながりを生みやすいことを確認。

3. 文京区課題の検証
検証：事前・事後アンケート数値と自由記述を比較検討した
課題①：地域のつながり
→ 事前の「前もって顔見知りになっておく」という回答などから つながりの重要性は認識されているが、実践できていない状態
課題②：子育て世代の備え不足
→ 水・トイレ・温度・薬などの不安が顕在
課題③：多文化共生防災
→ 「簡単な言葉」「言語」「手話」伝達の壁が明確に存在
課題④：都市型火災
→ 今回のアンケートでは直接的な言及なし ＝認知不足の裏付けとなり、課題の存在を示す必要がある
課題⑤：要配慮者支援
→ 「持病」「薬」への不安　個別配慮の必要性は高齢者も顕在
→ 要配慮者に関する記述増加 →⑤課題の顕在化
「車椅子ユーザー、シニア、子どもとを連れた親子、外国人、ろう者が一緒に学ぶことができた」それぞれの特性を認識できる機会が必要
課題⑥：情報ツール活用不足
→ デジタル・アプリに関する記述なし　認知・活用ともに低いと推測
本企画を通じて、参加者の不安内容、多様性への意識、行動に至っていない現状が明らかとなり、設定した課題は机上の想定ではなく、地域実態と一致していることが確認された。

第2回 映画「生きる 大川小学校津波裁判を闘った人たち」上映会
1．成果の達成度（10点満点）
評価：8.5点／10点
■理由
＊本事業の目的である「知識 → 自分ごと化 → 地域への行動意欲の醸成」は明確に達成された。
■主な成果
●①「知っている」から「やってみたい」への変化
災害時の行動が「知識」から「実践意欲」に変化
-実施前の不安は自分の生活案件（トレイ、ゴミ、水、避難所など）に集中
・災害後に近所の人と連絡方法について話しているか27%
-実施後、「すぐ逃げるか、どこへ逃げるか」「耳が聞こえないので理不尽なことが何度もあり、あきらめてしまっていた」「家族でその時を想定して 避難場所を話し合っておくこと 大切だと思います」「津波で亡くなった人のことを考えたらぼくも頑張って生きようと思った」「先生が言っていることは間違っていることがあるから自分で考えて行動する」「情報を得る努力を前面に出さなくては周りの人の理解が得られないと思った」「マニュアルなどをちゃんと作って訓練をすること」など自由記述の質が変化
・災害後に近所の人と連絡方法について話したい 55% (2倍に増加)
➡ 「つながりの希薄化」に対する明確な改善の兆し
・映画を通して「自分だったらどうするか」を考えた人→ 100%
●②基本的備えの不足
実施前、「学校に行っている時に大地震がきたら、家族とバラバラになるかもしれないので心配」「パニックになるかな？」など準備不足が明確に
実施後、「事前に、どのような 準備が必要なのか考えさせられますし、今も考え続けています。」「家族との災害時における対応の話し合いは本当に必要だと思いました。」
家族と話したい：71%が意欲を表明（50%が強い意欲）
近所と話したい：58%が意欲を表明(42.4%が強い意欲)
●③インクルーシブ防災の理解（課題③・⑤）
事後の自由記述より：
「何より、ひごろの関係構築だと思います。顔の見える関係を築けるよう、コミュニケーションを地道に続けることが、とても大切だと思いました。」「手話通訳が入った映画を熱心に観ていた人たちが、手話通訳士による監督さんの話を 聞いておられたし、見た目では聞こえない人だとは全くわからなかった。手話は必要 なんだと思った。」「地域と学校の連携は大切。しかし、役所が言っているだけの形の連携は無意味。意見 や思いを互いに伝え合うコミュニケーションを積み重ねていくことが重要。」
➡ 多文化・要配慮者への視点が具体化
●④都市型地震火災リスク

企画の成果	前後でも記述かない。「津波」から「同時多発する地震後の火災」への想像が及んでいない現状を把握 重要な自由記述としては「すぐ逃げるか、どこへ逃げるか」「自分で考えて行動する」「地域の中での対話が必要」がありリスクを明確にする必要 ➡ 自分だけの判断と“対話への転換が確認された ●⑤要配慮者の意識不足 小さな子ども、外国人、高齢者、ペット、聞こえない人の順に助けが必要な人が認識されている現状を把握。聴覚障害と危険認知について意識不足確認 ●課題⑥防災アプリ・情報ツールへの言及がほぼない 2. 気づき・再確認事項 ■新たな気づき 被災地の映像体験は「自分ごと化」に非常に有効 「正解がない状況」が思考を深めるきっかけになった 遺族への感情（共感・葛藤）が行動意欲を強く引き出す 会場での手話・字幕などの情報保障は“気づき”を生む装置になる 手話入りDVDはろう者も初めての体験となった ■再確認できたこと（課題との対応） 課題① 地域のつながり➡ つながりは“必要と理解されているが未実践” 課題② 備え不足➡ 具体化の段階に移行できる可能性 課題③ 多文化共生➡ 伝達の具体例に触れて、次は関係性が大切と確認 課題⑤ 要配慮者支援 ➡「聞こえない当事者の声」“存在の可視化”が行動変容の鍵となると認識 課題⑥ 情報ツール➡ “知られていない課題”として再確認 3. 課題は文京区の実態だったか 検証：事前・事後アンケート数値と自由記述を比較検討した 課題①は“最大の難関”であるが、対話意欲が大きく伸びた ➡ 関係性が課題でありそれを作る場を持つ必要性が明確に 課題②は不安が明確になった。意識は上がったため、行動に移せているのかの橋渡しが必要 課題③⑤は手話・当事者の存在により無意識が認識すべきことに変化 課題④⑥は言及なく、意図的に入れないと一生気づかれない領域の課題 6つの課題は文京区の実態と一致していることが、より強く裏付けられた

第3回「自分の備えと学校・地域の備え」検
1．成果の達成度（10点満点）
評価：9点／10点
■理由
第3回はこれまでの第1回：自分の備えの不安への認識、第2回：被災現状を知り自分ごと化を踏まえ、「行動・役割理解」へ踏み込んだ回であり、最も地域の実際の備えにより近づいた回である。しかし参加人数が少なくマイナスとした。
・第１回に参加した人67%第2回に参加した人33% 向丘地区以外の町会の防災役員の参加が新たにあった。
・回答者全員が町会所属者。参加理由は「内容が面白そうだった」64%
■主な成果
●① 行動・判断への踏み込み「共助作りの必要性、再認識」
「横浜の取り組みは模範となって来そうです」「発災し避難所でこのようなニーズが次々伝えられても、あらかじめ知 らない住民のことだと、避難助運営は混乱して、制限する対応になり かねないな…と想像し、平時から話せるような機会をつくることがで きないか、と考えさせられました。」「自分の命、家族の命が大切なように、お隣の方々の命も大切に思えるような意識を持ち続けていること」など記述あり
-「学習会前と比べて考えは変わりましたか」100%
事前では、「家の倒壊、停電などインフラ関連、ペット飼いの為、同行避難出来るのか？」「トイレ、通信、避難所」自分の生活への不安の記述あり
・災害後に近所の人と連絡方法について話しているか27%
-事後では近所の人と災害時の行動について話したい80%(40%が強い意欲)
その場で考えてすぐ動くことが大切だ80%（54.5%が強く思った）
➡ 初動判断力への意識が明確に向上
●② 具体的備え
今回の参加者は事前の調査で、トイレ備蓄：90.9%実施、水・食料7日分63.6% 家具固定：未実施・一部が約80%が実施と回答
町会所属者の備えは進んでいるが、①の連携は難しいことが明確
参加者一部に「知らないことが多すぎて自分の知識不足を実感しました」
後日メンバーで町会員ではない子育て世代の視聴後の感想
「避難所や備蓄量、想定人数、運営方法などの情報公開が不足している。」「自助・共助が前提とされているが、「何をすればよいのか」「どこまでが自分の役割か」が具体的に示されていない。」と感じていると記述あり
●③インクルーシブ防災の具体化（課題③・⑤）
自由記述より：「相手の立ち場を理解して助け合うこと。」「他の人の協力を得ること。 」「分かりやすいこと、正確であること、平等であること」 「分かりやすい言葉で書いて知らせる(やさしい日本語)、サポートが必要な人 のことを事前にまちの人が知っていて、いざという時知らせられるようにす ること」
➡ 配慮の方法まで具体化（第2回よりやや進展あるいは従来からの町会の課題を意識

できたか)
●⑤ 防災の本質理解に進展
自由記述：「配慮が必要な人というのが、具体的にどのような配慮が必要なのかを、平時から子どもも含めた地域で学ぶ機会を作っておく。」「発災 時、配慮が必要であることを伝えやすくなるよう、避難所などに窓口や掲示を用意したり、配慮に対応できる専門職などに来てもらっ たりできるようにする。」「先生(講師)が報告してくれた学習会の場面で、『(避難所で子どもが大勢の場所にいられないため)音楽室を使わせて欲しい』と言われた方が、平時に周囲にお子さんのことを話していない、(ため、避難所では単なるクレーマーと取られてしまうかも知れない)というお話が衝撃的でした。平時から話せずに居る親御さんの気持ちも理 解できるし、話せる場面がないというのも課題なのかも知れないな と。」➡ 公助依存からの脱却し、地域での支援が明確に認識
●課題④は認識されたが、具体行動まで未到達
●防災アプリなど情報ツール（課題⑥）は依然弱い

降雪、本郷での避難所総合訓練と日時が重なり広報を控えたためか、参加人数が少なく（12名）、波及性が町会員についてのみ述べられるに留まる。

2. 気づき・再確認事項
■新たな気づき
全世代で「知っている」ではなく役割が分からないことが最大の壁
避難所は「行く場所」ではなく運営する場所と認識されていない
備えについて行政は情報提供や訓練を実施しているが、残念ながら十分に届いていない
教育の現場の学校と、避難所になる学校が連続していない
町会の防災役員と避難所運営委員が別の人間であることが大切
当日参加はできなかったろう者からのコメントによる気づきとして
-当事者もどのような支援、方法があるのか知らない
-文字情報は手っ取り早いが話し手のスピードで理解が追いつかい場合もある.
-手話は全体的(顔の表情、体の向き、動かし方、手の動きなど) に目に優しい
■再確認できたこと
●課題① 地域のつながり➡ “つながりの弱さ”は依然最大課題
●課題② 備え不足➡ どこまでが備えなのか不明(家庭の役割が不明なため)
●課題③ 多文化共生 ➡やさしい日本語・情報伝達の必要性が明確 ●課題④ 火災 ➡不安の記述はあったが、行動化に向けて記述はない
●課題⑤ 要配慮者支援 ➡「事前に知る」「掲示」「窓口」など具体策が出現「専門家」必要性が明確
●課題⑥ 情報ツール ➡ アプリは言及なし紙→デジタルのギャップ
ハザードマップは認知（72.7%）

3．課題は文京区の実態だったか
■検証方法 事前事後のアンケート数値と自由記述
●課題①→ つながりがないから
要配慮者が見えない
情報が伝わらない
共助が機能しない
➡ すべての課題の根本原因ではないか
●課題②→ やりやすいもの・町会員では進んでいるかも知れないが、子育て世代では確認、体験・実践が必要
●課題③⑤は→ 課題①同様つながりがないため「関係性」を生む場が必要
●課題④⑥は ➡ 意図的に導入しなければ認識にも至っていない
第3回は「行動の入口」まで到達した回
しかし本質的課題は明確：➡ 「何をすればいいかまだ分からない」
追記：（第1～3回) 不安（生活) 、初動の自分ごと化、初動の役割・行動
➡ 課題がそれぞれに存在し、大地震発生までのタイムリミットがそんなにない中で、待ったなしの現状で進化させる必要を確認

４．本企画を経て、今後の団体の活動の展望についてご記入ください
a．3回の事業から見えた最も重要なこと
第1回～第3回を通じて、防災における地域の課題は単独ではなく、構造的に繋がっていることが明らかになった。
■最重要：現時点で多くが「何をすればいいか分からない」状態

b．地域課題の整理が必要（6課題を３つに統合）
■①最重要課題
課題① 地域のつながりの希薄化
近所と話していない「近所の助け合い」の認識不足
要配慮者が見えていない
共助が機能しない現実の受け止め
➡ すべての課題の“原因”
■②行動の課題
課題②・④・⑥
備え（備えの内容・量に加えて自分の役割の認識不足）
地震火災（知られていない）
情報ツール（使われていない）
➡ どの世代にも通じる課題

■③関係性・多様性の課題
課題③・⑤➡ あえて①と分けると“関係を持とうとする態度”が鍵

c. ごちゃまぜ防災の意義
本事業の最大の成果は防災を「学び」から「関係づくり」が拡大したこと
ごちゃまぜ防災とは
子ども・大人・高齢者・外国人・障がい者
学校・地域・家庭
専門家・住民
が混ざることで“顔の見える関係”を自然に生む、情報保障が入った防災により課題を包括的な解決につながることを明示した

d. 今後の活動の展望として
① 学校×地域の一体化モデル
●方向性　公立学校と地域が「防災拠点」から「共に防災を学び合う場」へ
つながるように団体が資源として持っているものを生かしていく必要
●具体施策
・子ども参加型ごちゃまぜ応急救護ワーク
大人も子どもも、外国人も障がいのある人も、「ぼく・わたしの役割カード」が自分で書ける結果となるような実践的なワークの創出
子どものエネルギーを起点に家庭、地域へと波及させる
家具の固定やトイレ対策など命に直結した内容を具体的に提示する
●重要な視点として
・学校が本来の教育の場へと発災後も早期に戻れるように
➡地域の協力・保護者の協力を得られる安心感の醸成
➡備えへの意識を行動に変える仕組み（見える化/数値目標/継続性)

② 楽しさを軸にした防災（弊団体の基本姿勢）
防災は「怖い・大変」では巻き込めないので、 “楽しいから関わる”設計へ
弊団体だけで頑張るのではなく、教育者の力を借りて学習の場への展開を図る

●具体施策
防災盆踊り（既存活動と連動させてしまう）
防災×遊び（既存活動を学習活動への発展）
自然な関係構築
●重要な視点として

楽しみを生み出しながら関係を広げることが、課題①を根本解決の一つとなりうる

③ 情報保障を“標準”にする

情報保障は特別な配慮ではなく「誰にでも優しい支援」
●具体施策
やさしい日本語・ピクトグラム活用徹底
手話・字幕の標準化　指摘された字幕と映像の位置、環境の整え方をまとめて配布できる資料にする
多言語資料作成のために連携先を探す
●重要な視点として
課題③⑤の同時解決以上に、
「分からない」は命のリスクであることの周知を忘れない
「分かる」は安心と当事者自身の行動につながる

●重点テーマの現状維持を継続
課題④
地震火災については、今後も町会役員会へ地震火災イマジネーションの地図の持ち込みを働きかけを続ける
➡ 町会リーダーが　“なんとなく放置”や“知らないまま”の状態をなくす
情報保障を“標準”にした取り組みを紹介とする機会とする
目にみえる「無事ですタオル」の掲示活動は、コミュニケーションの第一歩であり、絆を生む活動であることを周知する

今後も必要なのは👉「楽しい × ごちゃまぜ × 情報保障」であり、地域のステークホルダーとつながって環境整備に一層の磨きをかけギャップを埋める「つながる」場の創出に向けて活動をしていく。

※追加別添１：この事業を通じて制作したチラシなどのデータ
※追加別添２：この事業の様子が分かる公開可能な写真データ（10枚以内）
※追加別添３：この事業にかかった費用の根拠資料の原本（領収書や支払い明細書など）

助成:文京区社会福祉協議会　提案公募型協働事業（Bチャレ）

協力
誠之小学校
地域学校
協働本部

@5KINJODEBOSAI

みんなで大地震の初動をまなぶ

ごちゃまぜ
防災アクション

～ 未来へつなぐ地域力 ～

情報保障つき
手話通訳
文字通訳

＊むりょうアプリ UDトークで
多言語でもじおこしできます

日本は地震が多いです。地震の時、どうしたらいいか知っていますか？
地震で命を守るための大事なことを学びましょう。参加は無料(0円)です。

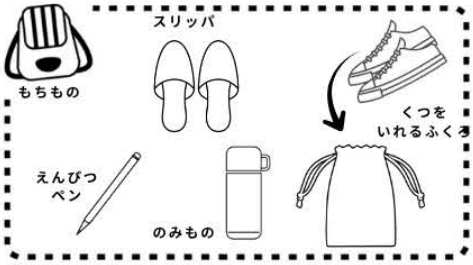
第1回　ワークショップ「おうち防災」

講師:防災アナウンサー 奥村奈津美氏

12月14日(日曜日)
12:45 ～ 14:35
受付:12:30~

場所: 文京区立誠之小学校 体育館 (文京区西片2-14-6)
入り口：西門　※正門から、はいれません(地図→)

参加賞
防災食



14:20 -14:30
インクルーシブな盆踊り
「いのちを守ろう音頭」
ステージ参加者(10人)に
「てぬぐい」もらえます

おしらせ

第2回 2026年1月25日(日) AM9:30-12:00　会場：文京学院大学 本郷キャンパス(向丘1)
映画上映会「生きる 大川小学校津波裁判を闘った人たち」
※英語字幕・『HELLO! MOVIE』方式バリアフリー上映・ちいさなお子さまをあずかります
参加費：free ¥0
共催：都市災害研究会
第3回2月8日AM10-11:00オンライン防災学習会 講師: 認定NPOかながわ3.11ネットワーク代表理事 石田 真実氏

わからないとき
防災啓発ボランティア団体
主催:ご近所 de BOSAI
✉: kbosi311@gmail.com

申込み方法
12月13日12時までに、
右のQRから、申込んで
ください。

１．事業名
事業名：みんなで大地震の初動を学ぶごちゃまぜ防災アクション　~ 未来へつなぐ地域力 ~
助成名：提案公募型協働事業（Bチャレ）

２．第１回目事業の目的・ねらい

- 本事業は、Bチャレ助成を受けた３回連続事業の第１回目として実施
  （第１回）「おうち防災」ワークショップ講師：防災アナウンサー　奥村奈津美氏「大地震発生後の初動期」に焦点を当てた防災教育の導入回であることを明記
  初動期の家庭での備えを自ら点検・改善する行動につなげるたい
  若い人からシニアまで興味を持ちやすい自分の備えについてのイベントを開催
  外国にルーツのある人、聴覚に障がいのある人など、**多様な住民が安心して参加できる防災の形**を検証
  事前・事後アンケートにより、意識変化とニーズを把握すること

３．実施概要
日時：12月14日日曜日 12時45分～14時35分
会場：文京区立誠之（せいし）小学校の体育館
参加費：無料
持ち物：上ばき、くつ袋、筆記用具、飲みもの、エコバック
参加人数：42人
フミコム3人・統括コーディネーター1人
欠席数：合計5人(ろう者１、外国人1含む)
・小さな子どものためにウールのピクニックラグを用意
・地域住民・保護者が混在する「ごちゃまぜ」参加型

広報：
・誠之小学校家庭数＋教職員
・向丘活動センター所管12町会、センター公式LINE
・SNS(LINEグループ、FB、Instagram, Peatrix)
・中国人によるwechat発信
・団体メーリングリストほか

４．プログラム内容内容
簡単なワークとして、隣の人と見せ合う参加型構成
防災用品の実物・報道に関わったものとして特別感のある被災地の動画や証言が入った説明
1. 自己紹介(東北などの報道動画、被災地支援の紹介含む)
2. 地震対策(ハザードマップの確認やワーク、防災用品の紹介)
3. パーソナルカードの紹介と作成の必要性
4. おうち避難訓練のススメ
5. 正常化のバイアスについて
6. まとめとQ&A
<< そのほか>>
・社会福祉協議会から災害ボランティアセンターについての紹介
　トイレキット提供
・インクルーシブ防災盆踊り:10分　様々な国の挨拶クイズ(日本手話・英語・タイ語(欠席)・中国語)
一緒に踊る人(10人）に手ぬぐい 進呈
・おわりのアンケート回収
　　備蓄品提供

５．インクルーシブな工夫・配慮
特別配慮事項：
ろう者・聴覚障害者・外国にルーツをもつ人への対応
助成金の活用先:文京手話会から手話通訳士2名派遣
そのほか：UDトーク・スライド文字情報投影

- 手話通訳の配置と文字情報用スクリーンの工夫
- 文字情報（字幕・資料提示）のために事前に語彙登録を実施
  当日入ったスタッフでUDトークの語彙登録を共有
- 誰もが楽しめる「インクルーシブ防災盆踊り」をプログラムに組み込んだ

特記：

- 文京区社会福祉協議会の職員の協力により、事前にUDトークの投影について指導を受けた
- 誠之小学校の統括コーディネーターのご協力により、事前に会場視察、投影練習を実施できた

６．アンケート実施の概要
事前（はじめの)アンケート／事後(おわりの)アンケートの実施
内容の特徴
ー 防災意識・行動・地域・住宅の形態との関わりの変化を把握すること盛り込んだ
ー 属性項目に 外国にルーツのある住民、聴覚に障がいのある方
などを含め、多様なニーズを把握できる設計とした
ーろう者とまず属性のところを確認し作業に移った
ー精神看護師で修士を持っているメンバーに項目の設計を相談
ー防災教育コンサルの石田さんに最終確認を実施
特記：
・紙のアンケートにはルビをふる
・Googleアンケートフォームでは、漢字のあとに振り仮名を配置
これらを chatgpt、canvaの機能を使い分けて実施できることを会得
・メンバーのろう者と解決できなかった項目については社会副協議会の職員にアドバイスをいただいた

７．得られた気づき・成果

- 実施して分かったこと
  - 動画・物品の紹介を織り交ぜての自宅の備え方のワークを選んだことは正解だった
    今後の市民防災講座のオープニング講座としては、この内容が幅広い世代を呼ぶ
  - 「自宅をどう備えるか」に加えて、「ハザードマップの活用」は関心が高いテーマであった
- 手応え

- 車椅子ユーザー、シニア、子どもとを連れた親子、外国人、ろう者が一緒に学ぶことができた
- 小さな子どもたちも最後まで体育館に滞在で、家庭内の会話につながる可能性が見えた
- 参加したろう者より、手話と文字情報の二つがあって大変よく理解できたとのこと
- インクルーシブな要素（手話・言語・盆踊り）により「ごちゃまぜ」を楽しく体験できた
- 事前のアンケートにより防災に対して意識が比較的高い人々の参加であることが見られたが、事業を実施することにより、何をすれば命を守れるのかが明確になった
- 地域にろう者がいること、地域の防災訓練やつながりの大切さを認識された人が見られた　以上

文京区社会福祉協議会の提案公募型協働事業(Bチャレ)

小さな子どものあずかりあります
託児あり

いのちをまもるための
映画会

入場無料

第2回みんなで学ぶごちゃまぜ防災

「生きる」 大川小学校津波裁判を闘った人たち」

東京都推奨映画 主に小学生（高学年）以上におすすめです
『HELLO! MOVIE』方式に対応した視覚障害者用音声ガイド・英語字幕つき

2022年文部科学省選定作品

「先生の言うことを聞いていたのに」74人の児童が犠牲となった大川小学校。その真相を、遺族の真実を求める闘いが明らかにする。裁判官の言葉は、学校と社会、私たち一人ひとりに重く突きつけられる。

監督：寺田 和弘　　上映時間124分

1月24日(土)

12時30分上映開始

- 12時15分受付はじめます
- 上映後に遺族の只野さんがリモート登壇

文京区立誠之小学校 体育館　西門から入れます　住所：文京区西片2-14-6

第3回 2月8日 AM10-11:00オンライン防災学習会　講師: 認定NPOかながわ3.11ネットワーク 代表理事 石田真実氏

QRコードから事前に申し込んでください

協力：誠之小学校地域学校協働本部　　主催：ご近所 de BOSAI

１．事業名
事業名：みんなで大地震の初動を学ぶごちゃまぜ防災アクション　～未来へつなぐ地域力～
助成名：提案公募型協働事業（Bチャレ）

２．**第 2回目の目的・ねらい**

- 本事業は、Bチャレ助成を受けた３回連続事業の第 2回目として映画上映会を実施
  東京都推奨映画「生きる 大川小学校津波裁判を闘った人たち」
  過去の教訓から映画を通して、「初動の大切さ」を知り、いのちを守るために、自分だったら、自分の学校だったら、自分のコミュニティではどうするだろうと重ねて考える機会を提供するため。

３．実施概要
日時：2026年1月24日土曜日 12時30分～15時00分
会場：文京区立誠之（せいし）小学校の体育館
参加費：無料
持ち物：上ばき、くつ袋、筆記用具、飲みもの、エコバック
参加人数：52人(含むスペイン人1・台湾人1・児童/幼児 4人）
フミコム3人・統括コーディネーター1人・ボランティア4人・ろう者スタッフ１・英国人スタッフ１・日本人スタッフ2・
欠席数：合計７人

広報：
・誠之小学校家庭数＋教職員
・向丘活動センター所管８町会、センター公式LINE
・SNS(LINEグループ、FB、Instagram）
・団体メーリングリストほか

４．プログラム内容
1．映画の上映
2. 寺田和弘監督と現地の被災者とQ&A
体育館…手話版のDVDの破損により途中上映が滞った。映画を停止している間、寺田和弘監督より映画の背景、被災者が置かれた立場について語られた
理科室…英語版のDVD上映後、寺田監督、被災地の只野さんとネットでQ &Aタイム
<< そのほか>>
・おわりのアンケート回収　備蓄品提供

５．インクルーシブな工夫・配慮
特別配慮事項：地域住民・保護者が混在する「ごちゃまぜ」に配慮

- ろう者・聴覚障害者・外国にルーツをもつ人・小さな子どもを持つ保護者への対応
  ・英語字幕DVD上映…理科室で実施　・手話および日本語字幕対応DVD上映…体育館で実施
  ・託児…第二音楽室で実施　講堂後ろ…小さな子どものためにウールのピクニックラグを用意
- 文京区聴覚障害者協会の会員の方が、手話通訳士の派遣を手配していただいた
- ろう者メンバーがYYシステムズに連絡を取り、Q&Aタイムの文字起こしのご協力の申し出があったが、タイミングが合わず見送り。
- 誠之小学校の統括コーディネーターのご協力により、理科室、第二音楽室の提供を受けた
- チラシ、アンケートは、イラスト化ややさしい日本語や漢字にルビをふるなどに努めた
- 掲示物のイラストを準備

６．アンケート実施の概要

事前（はじめの)アンケート／事後(おわりの)アンケートの実施

内容の特徴

ー 防災意識・行動・地域・住宅の形態との関わりの変化を把握すること盛り込んだ

ー 属性項目に 外国にルーツのある住民、聴覚に障がいのある方
　などを含め、多様なニーズを把握できる設計とした

ーろう者とまず属性のところを確認し作業に移った

ー精神看護師で修士を持っているメンバーに項目の設計を相談

ー防災教育コンサルの石田さんに最終確認を実施

特記：

・紙のアンケートにはルビをふる

・Googleアンケートフォームでは、漢字のあとに振り仮名を配置

これらを chatgpt、canvaの機能を使い分けて実施できることを会得

・メンバーのろう者と解決できなかった項目については社会副協議会の職員にアドバイスをいただいた

７．得られた気づき・成果

◉　**実施して分かったこと**

- 多様な世代の参加が見られた
- 区外からの参加者や学校関係者の参加があった
- 「家族と災害について話していない」
- 文京区聴覚障害者協会の会員の方が手話通訳士の前に席が取りやすいように事前の準備必要

◉　**手応え**

- 映画が災害時の行動について「知っている」から「話したい・やってみたい」へ変化し、「知識」ではなく「行動のイメージ」を生んだ
- 家族と災害時の行動を話したい 、近所の人と話したい も、個人差はあるが全体に上昇
- 「自分ごと化」＋「次の一歩」が見えた

手話版DVDを観たろう者から「耳が聞こえないので理不尽なことが何度もあり、諦めてしまっていた」「情報を得る努力を全面に出さなくては周りの人の理解が得られないと思った」

- 多様な立場の人の命を守る視点」が具体化

手話版DVDを観た聞こえる人から「手話が画面について、違和感はなかった」「画面を一生懸命見てる人たちが、手話通訳士による監督さんの話を聞いておられたし、見た目では聞こえない人だとは全くわからなかった。手話は必要なんだと思った。」

- この上映会の効果のまとめとして

防災を「迷いながら考え、話し合うもの」として捉える参加者が増えた

「地域の人間と平等に意見交換を行なっておくべきだと思います。」「お互いに信頼し合うことが大切。相手のことも考えながら」「地域の人たちと交流を深めて、もしもの時は協力できるようにした方がいいと思った」

家庭・地域・多様性への兆しが生まれたことが認められた

以上

@SKINJODEBOSAI

助成:文京区社会福祉協議会　提案公募型協働事業（Bチャレ）

協力
誠之小学校
地域学校
協働本部

文京区に関わる皆さまへ

この まちに いる あなたに、

知っておいて ほしい 話です

第３回 みんなで大地震の初動をまなぶ
ごちゃまぜ 防災アクション ～未来へつなぐ地域力～

2月8日 (日曜日) AM10:00~11:00

オンライン学習会

参加費：free ¥0

内容

「自分のそなえと 学校・地域のそなえ」

- 地震が 起きた すぐあと、どう うごくか
- 自分の 家で できる そなえ
- 学校 や 地域で している そなえ
- みんなで できる こと

講師

認定NPOかながわ3.11ネットワーク
代表理事
石田　真実氏

<プロフィール>
元中学校教師で防災士。東日本大震災をきっかけに被災地支援活動をはじめ、2013年5月にかながわ311ネットワークを設立。「自分のいのちを自分で守れる子どもを育てる」「災害に学び未来に備える」をモットーに、神奈川県内の小中学校をはじめ、避難所運営委員会や市民団体等で講演やワークショップを実施。

申込先

2月8日AM8時までに、右のQRから申込んでください。

主催

防災啓発ボランティア団体
ご近所 de BOSAI

家庭・学校・地域、
それぞれの 立場で
できる ことを
いっしょに しりましょう

わからないとき　kbosi311@gmail.com

１．事業名

事業名：みんなで大地震の初動を学ぶごちゃまぜ防災アクション　～未来へつなぐ地域力～

助成名：提案公募型協働事業（Bチャレ）

２．事業の目的・ねらい

- 本事業は、Bチャレ助成を受けた３回連続事業の第 ３回目としてオンライン学習会「自分の備えと学校・地域の備え」を実施
  講師：学校防災アドバイス・講演：かながわ3.11ネットワーク 理事 石田 真実氏
- 自分の備えと学校・地域の備えを理解し、自助の重要性、地域防災の必要性を理解していただくため

３.実施内容

日時：2026年2月8日（日）　AM10-11:00 @ZOOM

参加者件数：12 (社協スタッフ3含む)　申し込み件数：17(視聴希望人数 20人）

広報：

・誠之小学校家庭数＋教職員

・向丘活動センター所管12町会、センター公式LINE

・SNS(LINEグループ、FB、Instagram）

・団体メーリングリストほか

４．プログラム内容

1．講師紹介

2．「自分の備えと学校・地域の備え」（詳細を書く必要あり)

<< そのほか>>

・はじめとおわりのアンケート実施

５．インクルーシブな工夫・配慮

特別配慮事項：

・オンラインで実施

・字幕表示

・チラシ、アンケートは、イラスト化ややさしい日本語や漢字にルビをふるなどに努めた

６．アンケート実施の概要

事前（はじめの)アンケート／事後(おわりの)アンケートの実施

内容の特徴

ー 防災意識・行動・地域・住宅の形態との関わりの変化を把握すること盛り込んだ

ー 属性項目に 外国にルーツのある住民、聴覚に障がいのある方
などを含め、多様なニーズを把握できる設計とした

ーろう者とまず属性のところを確認し作業に移った

ー精神看護師で修士を持っているメンバーに項目の設計を相談

ー防災教育コンサルの石田さんに最終確認を実施

７．得られた気づき・成果

◉　**実施して分かったこと**

- 自助が前提である」という理解
- 「共助を平時からつくる必要性」
- 「避難所は自分たちで運営するもの」という認識
- 文京区聴覚障害者協会の会員の方がリピートで参加

◉　**手応え**

① 自助（自分の備え）への認識 受け身の不安 → 主体的な備えへの意識へ転換
事前では「不安」「何が起きるか分からない」という漠然とした心配が中心だった
事後では「助けてもらえない前提」「自分で備える必要がある」という認識に変化。
② 初動期の現実“厳しさ”を理解
事前は災害後のイメージが断片的（停電・家族安否など）だった
事後では「すぐには支援が来ない」「時間がかかる」という現実的理解が深まった。
③ 共助（地域での助け合い）への意識
事前は個人や家族の課題に意識が向いていた
事後では「共助づくりの必要性」「地域での支え合い」が強く意識されるようになった。
④ 多様な人への配慮意識
事前は要配慮者への具体的イメージが乏しかった
事後では「どんな配慮が必要かを平時から共有」「伝えやすい環境づくり」など具体的な視点が増加。
⑤ 避難所運営への理解当事者意識への転換
事前は「避難所＝行く場所」という認識が中心だった
事後では「住民も運営に関わる」「一緒につくる場」という理解に変化。
⑥ 情報共有・コミュニケーションの重要性と“伝え方”への理解が深化
事前は情報手段への言及が少なかった
事後では「やさしい日本語」「分かりやすい伝達」「平時の関係づくり」など具体的な工夫が挙がった。
⑦ 平時からの準備の重要性
事前は災害発生後の対応に関心が寄っていた
事後では「普段から話せる関係づくり」「事前共有の必要性」など、平時の取り組みの重要性が認識された。
⑧ 学校・教育の役割への気づき
事前では学校の役割に関する具体的意見は少なかった
事後では「子どもへの防災教育」「家庭への波及効果」など教育の重要性が指摘された。
⑨ 防災の当事者意識
事前は「誰かがやるもの」「行政に任せるもの」という意識が一部にあったが、
事後では「自分も関わる必要がある」「役割がある」という認識が生まれた。
⑩ 行動への課題認識
事後では「知識だけで止まっている」「実践に活かせていない」といった自己認識が生まれた。

8. まとめ

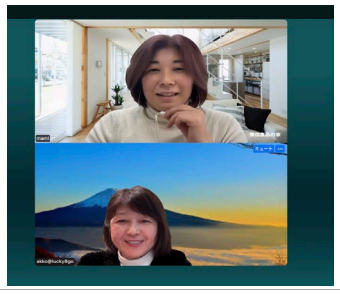
本学習会により、参加者は個人の視点から、地域・多様性を含む広い視点へ拡がり、当事者として関わる意識へ変化が見られたことは、まとめの回として自分たちの地域を見つける機会となった。しかし、防災危機管理課の避難所総合訓練と開催日が重なったため、掲示を求めにくく、SNSでの呼びかけも限定的となった。その結果、参加者が少なくなったことは大変残念な結果となった。

以上

20251214 第１回 「おうち防災」ワークショップ @誠之小学校体育館

20260124 第２回 映画上映 @誠之小学校体育館

託児 第二音楽室
英語版上映 理科室
写真なし

20260208 第３回 @ZOOM

20260214 第１～３回 アンケートの振り返り・今後の方向性について　@ZOOM　石田真実氏